シンクに選ばれし者

abito

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
シンクに選ばれし者

【Ｎコード】
Ｎ２５６４Ｚ

【作者名】
ａｂｉｔｏ

【あらすじ】
小さな頃に頭に痛みが走り、次の日から空にもう一つの世界が見えるようになった。誰にも見えない世界を唯一見る事が出来た大事な人も目の前で殺された。
初めて見えるようになってから約１０年の時が経ったある日、蔵で見慣れない剣を抜くと異世界に飛ばされていた。
いきなり古の魂に世界の命運を決める一人に選ばれてしまい、同じ宿命を背負わされた人の中には大事な人の面影を持つ人もいた。
想いと宿命が複雑に絡み合う異世界での冒険が始まる。

第００話　プロローグ（前書き）

この話の中で神様について書いておりますが、内容につきましては
あくまでフィクションです。
気分を害された方が居られましたら、深く謝罪致します。
初心者ですので、誤字脱字が多く見られるかもしれませんがどうぞ
お楽しみください。

第００話　プロローグ

遥か昔の大昔

神が創り治めた大地、エルフォニア
大地にはシンクが満たされていた。
神はシンクに形を与え人が生まれた。
神は新たな生物を次々に生み出し、
繁栄の時代が訪れた。

いつしかシンクに淀みが生まれ
魔物が生まれ始めた。

そこに新たな神が生まれた。
神は大陸を魔物達によって襲わせた。

戦いは長きに渡り
大陸は乱れていった。

闇に包まれてゆく世界
人々が絶望の淵に立たされた。

まさにその時、このエルフォニアに
託された力を携えた戦士達が舞い降りた。

その手には神の力を宿す武具を

戦士達の奮闘と犠牲により
魔物を迷宮に退け、歪みし神は封じられた。

永き戦いに終止符が打たれたのだ。

やがて、世界に
復興の兆しが見え、世界は再生した。

封じられた神が力を取り戻さんとき、
古の魂を受け継ぐ者達が世界を命運を決めるだろう

「ありましたよ先生…あなたが正しかった事を証明する為に、古の魂（シンク）を解き放ちます！」

そこには、古びた石碑の前に一人の人物が立っていた。

「テリウスの元で見ていてください」

石碑が光出し崩れていく中で、３つの光が飛び出した。
ここに運命の賽が投げられたのだった。

第００話　プロローグ（後書き）

お気に入り登録をしていただけたら嬉しいです。
誤字、脱字等ありましたら、報告をお願い致します。
ご感想、ご批判もお待ちしております。
それではまた次話の投稿をお待ちください。

第０１話　非常識の始まり（前書き）

続けてお楽しみください。

第０１話　非常識の始まり

好きな言葉は常識嫌いな言葉は非常識。
なのに、俺の日常は非常識だ。
いきなりなんだと思うが、俺の視界には通常見えるはずのない物が見えている。

俺の名前は、神城　怜治。
裏に道場が併設されくらい家はデカく名家の長男。
健全な精神は健全な肉体に宿るを地で行く親達のお蔭で、武術と現代日本にとって無駄スキルを小さい時から鍛えられ、ありえないレベルになっている。

俺にはみんなと違う所がある。
俺が６才の時に突然頭に痛みが走った。その時は理由が分からずに、気にも止めていなかったが、次の日から空に逆さづりの大陸が見えるようになった。
理由も分からずに、まず母さんに話したが見えていなかった。
次に友達に話したが誰にも見る事ができずに、帰ってくる言葉は嘘つきしかなかった。
親達は見る事が出来なかったが信じてくれた。けど友達は、最後まで誰も信じてくれなかった。
１人を除いては・・・・・

藤堂　由佳・・今は亡き俺の幼馴染で多分初恋だった子。
出会いは６才の時に、近所の狂犬に追われてれている所を力ずくで助けたのが始まりだった。
最もその時は大陸話で色々あって犬に八つ当たりするように黙らせただけだが、話してみると大陸を何も疑わずに信じてくれた。

なぜなら由佳にも見えていたからだ。
仲良く乗るのに時間は掛からなかった。
由佳も大陸が見える事に不安を感じていたのだ。

「今なら怜君ともう一つの世界を見てみたい。一緒に行ったら私を護ってくれる」

「言われなくてもまた助けるし、僕が由佳ちゃんを護るよ」

即答で返していた。
その時の由佳の笑顔と同じ物を見れる理解者が居ると知っただけで少しだけ元気になれた。
親に無理やりだが武術を教えて貰って、自分は強いという自信もあった。
しかし、一ヶ月も立たない内に突然通り魔に襲われ、俺も由佳も刺されて倒れた。

「イタイヨ・・・」

助けてを求めるようにこっちを見た由佳を見ながら気を失った。
由佳は死に、俺は生き残った。
そして、由佳の遺品を1つだけ貰い誓った。

「強くなりたい！」

親達が武術を無理やり教えるのでなく、自分から道場の師範代の爺ちゃんに頼んだ。

「何の為に力を付ける」

「由佳ちゃんと約束したから！」

俺の目を見ながら爺ちゃんは言った。

「教えた事には矜持を持て！信念を持ち、力ではなく心を鍛えろ！」

言っている意味が分からず首をかしげるしかなかった。

「自分を見つめ直せばいずれ分かる。途中で辞めぬなら鍛えてやろう」

「お願いします！」

当時６歳だった自分には色々な感情が渦巻いていてよく分からなかったが、由佳とした約束が自分を動かしていた。

「あれから１０年・・・あそこに行けたとしても、お前を護る事なんてできないのにな」

学校からの帰り道に首から下げている六角水晶のペンダントを触りながら空を見上げれば、昔と変わらずもう一つの世界が見えていた。

「頭で理解しても辞められないんだよな。爺ちゃんの言った言葉も理解していないらしいし」

小さい時の決意表明から、爺ちゃんには剣術と組手と家業の刀造りなどを教えて貰っている。

母さんは弓術を教えるようになった。弓術は色々な面で良いとして素直に習っている。

妹も小さい頃から擦り込みのように持たされて育てられている。
これ等は小さい頃の決意表明内だからまだいい。

親父に限っては別だ。年を追うごとにキックなっている。
家の道場で現在の師範代として剣術や組手を教えるのはまだいいが、山でのサバイバル訓練を称した山登りなんて意味分からない事から始まり、夏休みに海外旅行に出かけたと思えば途中で気絶させられてジャングル生活を余儀なくされた。
動物を相手に狩りまでした時には、俺の常識は何処に置き忘れてきたのかと思った。

最後には諦めの境地に達して、非常識こそ常識として受け入れろが座右の銘になった。
お蔭で、常識の範囲が人よりかなり広くなった。だから大概の事は、常識として受け入れられるようになってきている。
他人からみたら、あなたの常識は世間の非常識だと言われるくらいのレベルだ。
言われた時はへこんだが、親父よりは常識人だと思っている。

家に帰宅した。
ドアに手を掛けた時に嫌な予感がした。

「なんだ！俺の心の厄介警報が告げている。やばい開けたくない！」

ジャングルや親父に何度も精神的に、時に物理的に命の危機にあわされ続けて身についた危険察知だ。
すでに予知といっても過言ではない気がする。

ドアを開けて迎えてくれたのは爺ちゃんだった。
にんまり笑っているという事はまただろ。

「ただいま・・・・・その顔は、また作ったの？」

扉で迎えたのは、神城　怜心。今年御年７５歳の爺ちゃん。

「今日のは蔵に眠っておった、とある滅びた国の言葉だ！」

以前に蔵に忍び込んでみた事があるが、この世界の何処にもない言葉？の巻物やら壺やら刀剣類から火縄銃などの骨董品の山だった。

「だぁぁぁ意味分からねぇぇ！！滅びたのは、爺ちゃんの頭の中でさっき滅びたばかりだろ！何でいちいち労力使って変なもん作っているんだぁぁ！！」

「解ければ小遣い、解けねば・・・」

「解けねば何？？怖いから早く言って！！」

俺が記憶力が良くなった最大理由がこれだ。
爺ちゃんが作る暗号文や速読などの暇潰しの玩具にされ、おかげで語学や記憶力の方はかなり高いレベルになった。
これ以外は、殆んど全面的に最も尊敬している人なのだが、これだけは尊敬できない。

今日の暗号は、完全に記号の文章だった。
手帳にメモしてある内容との酷似は殆んどない。
毎度の事ながら７５とは絶対に見えない元気溌剌っぷりで、なんでこんなのを作れるのかいつも疑問に思う。
以前など親父まで一緒になって、どっかの古代語が出てきてヒントを貰って基本パターンを読み解けなければ絶対に解けなかった。

尊敬を通り越して呆れた。

ボケ防止になっていいらしいが、ボケる所が全然思い至らない。
刀を鍛えている時や道場に居る時の姿からは、年齢誤魔化している
だろうと言いたくなる。

結局今日は解けずに、道場で親父の神城　怜也と一緒になって投げ
飛ばされた。
家の秘伝らしいのだが、脳のリミッターを外すとか言う方法を取っ
ているせいで本当に飛んでいるのだ。
その親父も我が家最強の母親、神城　彰子の逆鱗にでも触れたのか
コテンパンされていた。
そして、最強の母も歳の離れた妹の神城　玲奈には精神的に負けて
いる。
あれ・・・・俺の家族内ピラミッドの最下位？とか考えた事が何回
もある。
玲奈は俺に優しいから問題ないな。
親父も溺愛しているから手を絶対に上げない。

「女性と子供には優しくするものだぁ！」

とか女性関係の格言みたいな事をで量産していて、それをバカ正直
に護っている所は素直に尊敬はしている。
子供なのに、なぜか俺には優しくない。
以前にそれを文句を言ったら・・・・

「玲奈は可愛い女の子なんだ！怜治は自分で何とかするだろ。その
為に色々教え鍛えている！」

前にテレビで見て、これをやらせてみよう。とか言ってやらされた物がある事を知っている。
そう言うのは大概身に付かなかった。詰まる所、思考が子供なのだ。
「そんな反応なら、玲奈が彼氏を連れてきたら大変だな！」
その時は定番のセリフだなと思って言っていた。
「私を斬り倒していける者でなくては玲奈はやらん！」
母さんとの結婚の時に先方の親が同じことを言って、本当に親を斬り倒して認めさせたらしい。
親父には道場で薄皮を何回も切られているから分かるが、勝てる奴は早々いないだろう。
「そんなんじゃ。玲奈は振られて御終いだな！」
「玲奈のどこが不服なんだ。そいつは許さん！」
その後ヒートアップしていくのを見かねて、母さんが殴打して引きづられて行く所を何も言えずに見送った。
なぜおふくろと言わないかって・・・怖いからに決まっているだろう。
やばい電波を受信したような。
道場での訓練後に飯を食べた後で暗号解読を始めた。
「わからねぇ！こんな時は道場で体を動かすか」
刀とメモ帳を持ちコートを羽織って道場へ行こうとした時、突然頭

に痛みが走った。

「蔵・人・光・・・・泥棒か？」

嫌なイメージがした事で不安感があった。
同時に少し嫌な予感がして、短刀も腰に隠し持って出る事にした。
中に入ると少しだけ埃っぽく薄暗く先が見えない。

「誰もいないな…良かった」

帰ろうとすると、物が落ちたようなガシャンと音がした。
瞬間的に、鞘状態で短刀を抜いたが誰もいなかった。
先に進むと剣が落ちていた。
この倉には、刀剣類もかなりあるがこれは見た事が無かった。

「反りがないし日本刀ではないのか？」

疑問に思いながら剣を引き抜くとカチっと音がなった。
瞬間、鞘から剣が抜け突然光だした。
光が納まるとそこには誰もいなくなっていた。

第０１話　非常識の始まり（後書き）

閲覧ありがとうございました。
これからも宜しくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2564z/

シンクに選ばれし者

2011年12月9日02時12分発行